

北京日本学研究センターにおける日本語教育

鈴木 義 昭

大変遅くなりましたが、先生方には、ここに改めて帰国のご挨拶をさせていただきます。昨年の四月から中国に出張し、今年の三月に帰国をしました。四月から八月までは、在外研修ということで、北京大学の中にある宿舎に泊まり、同大学の日本語学部で研修をし、九月から二月までは、海外出張ということで、北京の北京外国語大学の中にある、「日本学研究センター」で日本語・日本語教育に携わって来ました。この時は、北京友誼賓館が我々派遣教師の宿舎となりました。さらに、二月の終わってから三月の終わりにかけての約一ヵ月は、日本語研究教育センターの許可を得て、再び北京大学に舞い戻り、在外研修の続きをさせていただきました。一昨年の蒲谷先生以来、日本語研究教育センター恒例の行事ということで、帰国のご報告をさせていただくことになりました。ただ、帰国してからすでに三ヵ月も立ってしまい、余りホットな話題ではなくなりましたし、中国の事情については、ご出席の先生方の中には、お詳しい先生方も多くいらっしゃると思いますので、お役には立てないと思いますが、一年間楽をさせていただいたお礼替わりの報告と考えていただければ、幸いこれに過ぎたこととはありません。

ただ、後でも述べますように、私の在籍した「北京日本学センター」では、研修生に対する日本語教育の部分と、その他の部分、つまり、大学院の言語・文学コースと社会・文化コースとが比較的是っきりと分けられていて、標題のような「日本語教育」に関しましては、言語・文学コースの方に配属された私は、日本語教授法などのように、直接関係することが余

りなかったことを先ずお断りしておきたいと思います。お役目としまして、私が「北京日本学センター」から頂戴した役職は、お恥かしいことながら、言語・文学コースというセクションの副主任ということでした。総勢十四人しかいないわけですから、むろん、全体の会議等では、社会・文化コースの先生方ともご一緒させてはもらいましたが。取り敢えず、九月から二月までの六ヵ月間の北京日本学センターでの生活をお話することで、報告者としての責めを塞ぐことにさせていただきます。

さて、長すぎる前置きはこのくらいにしまして、北京日本学研究中心というのは、ご承知のとおり、「中国で日本語・日本研究や日本との交流に携わる人材の養成を目的として、中国政府(国家教育委員会)の要請により、日本政府(外務省・国際交流基金)が協力実施している」組織です。その前身は、故大平正芳首相が提唱した「日本語研修センター」(通称、大平総理の名前を冠して、大平学校と呼ばれていました)で、北京語言学院(現在は、北京語言大学に名称が変わりました。ついでながら、先程、北京外国語大学と言いましたが、これは現在の名前でありまして、「北京外国語学院」、「一外」と言った方が先生方には馴染み深いかも知れません)の中に設けられていました(1980年～1985年)。「大平学校」時代は、中国国内の大学等の日本語教員に対する研修を主な業務としていましたが、85年に北京外国語大学に移ってからは、従来からの教師研修コースに加えて、大学院修士課程及び図書資料館が設置されました。

大学院の修士コースは、言語・文学・社会・文化の四コースに別れています。難易度は、今読んだ反対順のようです。「大平学校」のプログラムで、あらかたの教師たちがブラッシュ・アップを終えていることと、かなりの教師たちがこの組織を利用せず、実際に日本に留学しているということで、言語・文学コースの方には、大学を卒業したばかりの学生が集まっていました。これは教師の研修コースにも言えることで、競争率はほぼ1倍、このところ、日本学センターの主任教授は——私の在職中は、東京大学名誉教授、中国文学専攻の竹田晃先生でした。ちょっと任期が重なりま

したが、前任者は同じく東京大学の東洋文庫の池田温先生でした。何故か、最近では、日本語関係の先生が主任教授になった例がないようです——全国各地を行脚して、研修生募集のキャンペーンを行っているほどでした。

ここの図書館は、比較的充実していて、和書が約四万冊、中国書が約一万冊、その他雑誌・新聞等が収められていて、休日・祝祭日を除き、学生たちに貸し出されていました。年間の予算は、結構潤沢に(約五百万円ほど)ありましたので、今後が期待されます。ただ、概ね新しい書物が多く、江戸期の版本などの和書は言うに及ばず、1980年以前の本等は、余り収められていないようです。その点では、「全中国における日本研究の資料センターを目指す」ためには、なお一層の予算措置が必要かと思いました。私が在職していた時、中日友好協会の孫平化氏が日本のある団体から貰った資金を贈呈して、孫平化記念文庫を開設しましたが、個人的な寄付も、もっとあってもいいなどと私は考えましたが。

なお、北京大学の中には、「現代日本研究コース」が設けられていて、同じく中国政府と日本政府が協力実施しているものですが、こちらは、「研究所研究員や修士課程修了者もしくはそれと同等の資格を有するもの」とあるように、高度の研修を謳っていますが、キャンパスも違っていましたし、交流も余りありませんでしたので、詳しいことについては、残念ながらよくわかりませんでした。悪しからずご了承くださいたいと思います。

さて、日本語教師に対する研修コースは、一年コース(九月～七月)で、一年置きに助手クラス(中国では、助教と呼びます。年齢制限があって、三十五歳以下)と教師クラス(年齢制限は五十歳以下)を募集します。私が赴任した時は、たまたま助手クラスの年(1993年度秋学期)に当たりました。授業は一週に二十時間あります(日本的に言えば、十コマ)。授業名は、次のとおりです。

「◎文章表現研究」,「◎論文選読」,「◎音声音韻論」,「◎日本語教授法」,「◆日本文学論」,「◎日本語学各論」,「◎日中言語比較論」,「◆日本地理風土論」,「◎日本語学概論」,「◆日本史」(◎は必修 ◆は選択)

私が担当したのは、「日本語学各論」という必修科目で、1班、2班の合同授業です。先生方ご存じの佐治圭三先生が集中講義で、「日本語学概論」をおやりになるということでしたので、私は今回は、森田・松木『日本語表現文型——用例中心・複合辞の意味と用法』を使って、助詞・助動詞・接続詞とそれの複合したものを、実際の作文課題とするとともに、それを利用して、さらには中国人学習者の誤用例の指摘を行うという、ちょっと欲張った動機で採用してみました。学生全員が現職の教師ということで、熱心な授業が展開しました。忘れ者の学生がいるにはいしましたが、私自身がこのとおりの忘れ者ですから、人のことは悪く言えません。(なお、この報告の後半部では、誤用例の一部を含めた、授業の簡単なご紹介ができたと思います。)

大学院コースでは、年齢制限があり、現行では、三十五歳以下ということになっていますが、来年からは、四十歳以下というふうに、改められることになっています。さらに、「就職後の再学習」という一項があって、現行では、二年以上就業することが義務付けられていましたが、それも一年以上務めればよいというように変わる模様です。これは、大学が全て国立で、授業料も無料ということから、有料化に向かう一つの動きかと思われます。かつて、大学卒業者は五年(?)以上務めないと、個人的な理由では、勤務先を辞めることはできませんでした。辞めるとすると、罰金を払わなくてはならなかったようです。早稲田に来ている留学生の中にも、何万円の罰金を払って日本に来たという学生の話聞いたことがあります。大学生の就職先を国家が決めるという制度(分配と言うわけですが)も、次第に緩くなって来たようです。去年私が見た例では、学生個人が勤務先を

捜すということも稀ではなくなりました。

大学院は、五学期制(修業年限二年半制)を取っています。授業は、一年生・二年生のうちに終えて、三年になると、半年間(この数年の例では、三月の下旬に来日し、九月に帰国します)、日本の大学に短期の留学をして、修士論文の準備をします。九月に帰国してからは、学校でワープロを借りたりして、修士論文を書き上げます。十二月の半ば頃(去年の場合、十二月十六日から三日間)には、修士論文提出者に対する「口試」(口頭試問)がおこなわれました。我々派遣教員は言うに及ばず、日本からも「答弁委員」(口頭試問の試験官)の先生が招かれました。各専攻で概ね二名ずつぐらい、総勢十人前後の先生方が来られたわけです。口頭試問は、十二月十六日から三日間に亘って実施されましたが、最初の日は、答弁委員の先生方及び修了予定学生に対するガイダンスが行われました。翌日、午前中二人、午後二人という、一人当たり一時間半のペースで、行われました。日本の、というより、私自身のはるか昔の経験によりますと、そんなに長くはなかったように思います。日本語で、自分の論文の纏めをし、それに対して、答弁委員の先生方の質問があるわけです。概して、中国人の先生の方が点数が辛かった、ということを証言しておきます。この試験に合格して初めて、コース修了、学位取得ということになりますが、実際の学位の授与は今年の一月に入ってからでした。

ここでは、社会・文化コースについては省略して、言語・文学コースの授業科目を紹介します。まず、一年生の言語コースの学生には、

「◆日中文学文化比較研究」、「◎マルクス主義理論」、「◆日本古典文学」、「◆社会文化論」、「◎英語」、「◆日本近現代文学」、「◎日本語学研究Ⅰ」、「◎日本語学研究Ⅱ」、「◎一般言語学」、「◆日本史」

の十科目、二年生には、

「○日中言語対照研究」、「◆日本対外関係史」、「◆中外文化交流史」、

「○日本語学特殊研究Ⅰ」,「◇日本語学演習Ⅰ」,「○日本語学特殊研究Ⅱ」,「◇日本語学演習Ⅱ」,「◎マルクス主義理論」(◎は必修, ◆は選択, ○は三科目中二科目選択, ◇は二科目中一科目選択)

の八科目が設置されています。私が担当したのは、二年生の「三科目中二科目必修」の授業、「日中言語対照研究」です。この科目は、文学コースの学生も選択できるようになっていますが、去年は言語コースの学生、四人が出席しました。修士論文を書き上げた三年生も加わっていましたので、総勢六人近くで授業をしていたことになります。三年生の学生の出席は、いいことはいいのですが、後で当の学生に聞いてみると、修士論文の口頭試験の前に、答弁委員と思しき先生の授業に顔を出して置いて、委員の人格を判断したり、質問の傾向を予め知っておきたいという、学生の心理から出たもののようです。半年毎に担当の教師が変わるわけですから、これも仕方がないことと思われれます。

私は、この授業では、日中対照研究の論文になるべく多く触れられるよう心掛けました。と言いますのも、言語コースの多くの学生は、修士論文を書く際、日中対照研究か、あるいは対照研究的な論文をテーマに選んでいるからです。昨年度の修士論文のテーマを見ても、「モダリティ表現の日中対照」、「色彩語についての日中対照研究」、「あいさつの日中対照」、「慣用句の対照研究」というような具合に、全員が日中の対照研究をテーマに選んでいるわけです。今年の三年生は、目下各大学の指導教授の下で、研修を行っているはずですが、彼らのテーマも、第一次の調査では、「翻訳外来語の日中対照——明治初期と清末期の外来語をめぐって——」、「日中同形語の研究」、「比喩的命名名詞についての日中対照」、「味覚形容詞について——意味分類の再考と転義の日中対照——」、「助詞『の』の意味記述的研究」のように、五人のうち、四人までが日中対照研究をテーマに選んでいます。

年度によって、多少の出入りはあるものの、大学院の言語専攻の学生た

ちは、日本語研究の中に中国語との比較対照をしたがっている傾向にあることが見て取れます。その点では、日中両国の共同研究の可能性が多岐に亘っていることでもありますし、逆に言えば、安易に対照研究に走る可能性も帯びていることが示唆されているようにも思われます。修士論文の答弁委員を務められた、東京外国語大学の K 教授は、口頭試問の反省会の時に、「中国の学生たちが自国の言語の研究を軽んじているのではないか」というような意味の指摘をされました。これは、翻って考えてみると、日本人が対照研究を行う時、却って日本語学の面が疎かになることの裏返しと、自らを反省したことでした。

念のため、文学コースの授業名を挙げておきますと、一年生では、

「◎日本古典文学」、「◇日本古典文学演習」、「◎日本古典文学論」、「◎英語」、「◎日本近現代文学」、「◎日本語学研究Ⅰ」、「◆日本語学研究Ⅱ」、「◆日本史」、「◎日中文学文化比較研究」、「◎マルクス主義理論」

の十科目、二年生は、

「○日本古典文学特研」、「◇日本古典文学演習」、「○日中言語対照研究」、「◆日本対外関係史」、「◆中外文化交流史」、「○日本近現代文学特研」、「◇日本近現代文学演習」、「◎マルクス主義理論」

の八科目です。一年度、二年度ともに、「マルクス主義理論」が必修になっているのは、研修生のコースにはないことから、「六・四」以来の、政府の学生に対する厳しさがこの年まで続いていると考えたらいいのでしょうか。兎も角、お国柄を物語っているように思います。

ところで、私が二コマしか持たなかったと言いますと、ご経験のない先生方からは恐らく、「持ちコマが少なくてよかったね」と言われるだろうと思います。それは確かにそのとおりだったわけですが、日本とは、とかくやり方の違う中国で、いろいろな事業やら行事を行うに当たって、結構忙しい思いもしたことを率直に申し上げて置きたいものです。つきまして

は、九月から二月までの事業・行事を追い追いお話ししていくことにします。

我々、1993年の九月から一月までの秋学期を新スタッフは、総勢十七名。長期派遣の一人、主任教授の東京女子大の竹田先生(前任者は東京大学の池田温氏、中国近世法制史)、短期派遣の常盤大学の柄沢(社会学)、弘前大学の田中(社会学)、鹿児島大学の木部(日本語学)の三氏が未着任ということで、十三名でスタートしました。この中で、日本語・日本文学関係のスタッフは、東京女子大の国岡氏(日本近現代文学)、九州大学の迫野氏(日本語学、三ヵ月在任、後任は木部氏)、京都外大の佐治氏(日本語学、一ヵ月の集中講義)、山形大学の須賀氏(日本語学)、国学院大学の伝馬氏(日本近現代文学)、信州大学の渡辺氏(日本古典文学)そして私でした。その他、経済学の赤城氏(愛知大学)、中国絵画の小川氏(東京大学)、中国近代政治史の中村氏(二松学舎大学)、日本近代思想史の松尾氏、日本マスコミ論の山本氏という面々です。それに、長期派遣の形で、飯野、市瀬両氏(いずれも日本語)、加藤氏(日中対照研究)の三名が研修コースを主として担当していました。先輩というわけです。

次は、職務分掌ということになります。

主任教授 / 主任教授補佐 / 言語・文学コース副主任 / 社会・文化コース副主任

カリキュラム委員会 / 学術委員会 / 編集委員会 / 図書委員会 / シンポジウム委員会 / 入試委員会

上の段は、センターの公式の組織図に載る職務で、真ん中と下の段は、専門委員会に属するものです。専門委員会は、各派遣教員が一つか二つ担当することになっています。私はコース副主任と編集委員・入試委員でしたが、日頃の私をご存じの先生方は危惧の念を抱かれることと思います。何とか無事に終えたことをご報告しておきます。

カリキュラム委員会は、私たちの任期中は、教学委員会と称せられ、カ

リキュラム委員会と学術委員会とを合わせた形で、何回かの会議が持たれました。カリキュラム全般を検討することが主でした。現在、北京日本学センターは、第二次五ヵ年計画の四年目に入っています。再来年からの第三次五ヵ年計画について、在り方も含めた今後の計画を議論するわけですが、第三次からは、規模が縮小し、北京外国語大学にある組織を北京大学にある「現代日本研究コース」の方に統合していく模様で、教師も日本語・日本文学等、一部を除いて中国人教師が授業を担当し、必要に応じて、日本からの短期の派遣に変えていくようです。その是非について、私は発言できる立場にはいませんが、やたらにリストラするような拙速は避けたいものだと思います。苟も一国の文化を伝えようとする場合、かなりの時間がかかるものではないでしょうか。

編集委員会は、各種出版物の刊行に係わる諸事務を行いました。同センターには、『日本学研究』、『日本学論叢』、『シンポジウム論文集』という三種類の機関紙があり、『北京日本学研究中心通訊』(『北京日本学研究センター通信』)という速報紙まであって、自分が属していたから言うものではありませんが、最も忙しい部署の一つだったように思います。この中で、『日本学研究』は、センターの主たる機関紙、『日本学論叢』は、修士論文、終了論文の中から優秀なものを選んで載せます。『シンポジウム論文集』は、毎年五月に開かれる、日本についてのシンポジウム(中心話題はその年によって変わります)の基調報告や研究発表、レジュメ等を掲載します。中国の慣例で、シンポジウム開催の直前までに仕上がっていないとかならないという制約があります。現在の問題点は、派遣教員の任期が短い(四ヵ月)ので、出版の実務を担当する人間が非常に少ないということ、それぞれの論文の質が低下していること(日本語で書くことになっているため、文章自体の問題が大きい)、積み残しの論文が多数あるということ、等々です。私たちの任期中には、このうち、『日本学論叢』の出版業務にあたりました。なお、『センター通信』は、ニュース性を重視して、一月に一回出すことになっていました。中国語版と日本語版とがあって、各会議等

の速記に近いものを載せます。中国側がニュース・ソースの場合、それを日本語になおし、日本側がニュース・ソースの場合、それを中国語に翻訳するという複合出版のため、中国語の力を買われて、私が参加したというわけですが、果たして評判はどうだったか、敢えて触れないことにします。

図書委員会は、万国共通だと思いますが、センターの図書予算の中で、どのような書物を購入するか、ということが主たる業務です。それに、図書館の開館時間(授業がある時期、休み中の開館、閉館時間)等について決めることも任務のうちということになります。

シンポジウム委員会は、先程少し述べたように、毎年五月に開かれるセンター主催の日本学に関するシンポジウムの企画、実施に責任を持ちます。「北京日本学研究中心の卒業生(大学院及び日本語研修コース)を中心とした日本学の研究者に発表の機会を与えて、併せてこれらの研究者と日本の研究者の相互理解を深める」目的で開催されるわけです。1987年から、これまでに六回開かれています(88年、89年は開催されませんでした。89年は、天安門事件の年です)。今年は、「日本の映画」について行われたはずですが、もちろん詳しく知るところではありません。

入試委員会は、入試問題の作成に当たります。その内容については、未公開ということになっていますので、恥を晒さずに済みます。で、その問題は、大きくは研修コースと大学院コースとに分かれ、大学院コースは、先程来お話ししてきたように、言語・文学コースと社会・文化コースに分かれます。試験問題としては、研修コース用、大学院の共通試験用、さらに、言語コースと文学コース用の共通問題があり、言語コースの専門問題があるというぐあいに、委員一人当たり二題平均、問題を作らねばなりませんでした。内訳は、古典語が二題、現代語が三題、言語に関するもの一題ということになります。私は、研修コース用の問題(ともに、言語関係)を作りました。これが結構時間がかかることは、先生方風によくご存知のことです。

我々派遣教員には、もう一つ役割がありました。公開講座というものです。公開という名前が付いているように、これは日本学研究センターの教職員・学生だけではなく、北京市の中にあり、日本語講座を持っている学校に全て連絡を出して、参加を呼びかけるものです。「大平学校」当時からも、これに似た会はありましたが、北京外国語学院に移った1985年9月から、1989年の春学期の一部を除いて、延々と続いて来ています。延べ195名の先生がそれぞれの分野で講演していることになります。今年度からは、日本側と中国側が交互に担当するというので、教員の負担が軽減されましたが、それまでは、各学期の毎週木曜日の午後がこれに当てられていたということです。それでも、持ちコマが二コマ以下の教員が“優先的”に指名されることになり、週二コマ担当の私は、立派に該当するというので、年齢順でいって最後から二番目に当たりました。その内容の一部は『講座日本語教育』に発表しましたが、「日中対照研究と日本語教育」という題で話しました。この講座では派遣教員が“十八番”としている題で話していいということでしたが、私はたまたまこんなことしかできませんでした。佐治先生は、「『は』と『が』」について話され、日本近代文学の「漱石、志賀、芥川について」を話した先生もいますし、「中国の山水画」について、「近代経済学における法と経済学」について、「孫文と黄興」について、「パプアニューギニアのこと」について話す先生もいました。その他、日本から何人かの先生が来て、「昭和文学に関するシンポジウム」を開いた先生方もいました。幸い、年齢制限に掛かって、公開講座発表は免れても、「研究発表会」というもう少し小さな会があり、公開講座に比べると規模が小さくなりますが、北京外国語大学の学生・教師を相手に話をしていましたから、結局は、公開講座をこなしたのと同じ結果になったように思います。

我々秋学期の、大学院の諸コース担当者の懸案事項の一つは、来年の三月から日本に研修に行く学生たちをどのように指導するか、日本に研修に行く際の指導教授にはどなたになっていただくか、ということでした。既

に春学期中(1993年5月)に第二回の調査と中間発表会が行われており、大枠の研究テーマも決定していました。この時の言語コースの学生のテーマの変遷を挙げて見ます(最初が1993年5月第二次調査、同年六月の中間発表、11月22日、23日の中間発表、最終的な決定、の順になっています)と、

Z さん: 「日中外来語について」⇒「同じ」→「翻訳外来語の日中対照」

X 君: 「日本語における漢語について」⇒「同じ」→「日中同形語の研究」

P 君: 「日本語における象徴についての考察」⇒「日本語における意味論の一考察」→「助詞『の』の意味記述的研究」

W さん: 「比喩の語構成」⇒「語構成における比喩」→「比喩的命名名詞についての日中対照」

J さん: 「味覚形容詞について」⇒「同じ」→「味覚形容詞について——意味分類の再考と転義の中日対照——」

ということになります。P君のように、各調査、発表毎に題が変わる学生もいるし、Wさん、Jさんのように、比較的安定している学生もいるわけで、題が変わったからといって、決して学生を責めることはできませんし、同じ題だから周到な配慮がしてあるというわけでもありません。しかし、何と言っても、日本での指導教官を決めるに当たっては、余りに変化が激しいと、学生にとっても、指導する先生にとっても好ましいことではないということは言えます。そこで、何回かの面接を行って、→以降の題に決めるとともに、どのような先生に指導してもらいたいかという希望を聞いた上で、指導教授の先生を内定したというわけです。他のコースも同様に、決定することになっています。大抵の先生は快く引き受けて下さり、国際交流基金を通じて、正式な承諾をいただき、現在、彼らは各先生方の下で、修士論文の作成の準備に励んでいるはずです。

なお、我々の言語コースでは、この作業は比較的うまくいきましたが、他のコースで、研修先が気に入らず、何度も話し合いを行ったケースがありました。そのため、教師側が受け入れ先の指導教授の先生がこの分野で、如何に優秀であるか、得難い機会なのだから是非そこへ留学するようにしなさいと説得工作に当たったケースです。中国側の先生の話によると、めったにないことだとのことでした。ともかく、理由としては、東京以外の所では、友だちもいないし、寂しいから行きたくないというものでした。本当の理由は本人にしか分かりませんし、事の是非は転々には判断できませんが、中国の学生にもこのような“我がまま”な人種が出て来たことは、記憶しておいてよいことかも知れません。

大学院言語コース：「日中言語対照研究」(全36時間=18コマ)

13. 「推量・伝聞」について
14. 「使役」について
15. 「受け身」について
16. 「敬語」について
17. 「複合辞」について
18. 「終わりに」(レポート提出)

研修コース：「日本語学各論」(全 38 時間＝19 コマ)

1. はじめに 《自己紹介文》 / 本時の方針説明
2. 《自己紹介文》の誤用例 / 課題の誤用例解説, [課題提示]
3. 課題 (No. 1) の誤用例解説, [課題提示]
4. " (No. 2) " , ["]
5. " (No. 3) " , ["]
6. " (No. 5) " , ["]
7. 練習問題実施
8. 第一回試験実施
9. 課題 (No. 7) " , ["]
10. " (No. 8) " , ["]
11. " (No. 9) " , ["]
12. " (No. 10) " , ["]
13. " (No. 11) " , ["]
14. " (No. 12) " , ["]
15. " (No. 13) " , ["]
16. " (No. 14) " , ["]
17. " (No. 15) " , ["]
18. 修士論文答弁会のため, 全学授業休講
19. 第二回試験実施
20. 終わりに

研修コースの場合も、九月からの四ヵ月で、答弁会の1回を休講しただけの18回という時間数ですから、日本の学期に比べると、授業時間数はかなり多めであったと思います。当初は、中国人学生の勤勉さと、そうした時間の多さを見込んで、「誤用分析」を主とするこの授業を立案したわけです。そもそも、「日本語学各論」という授業ですから、動詞だけを選ぶとか、助動詞だけを選ぶとかで、話をすることもできたわけです。しかし、私の十数年来の中国人学生に対する日本語教育の経験から見て、より実践的なやり方の方が彼らの要求にも合うと考えたからです。とは言いながら、むしろ当然のことではありますが、所期の目標である、テキストなるべく最後までやる、あるいはできるだけ沢山の事項に当たるということができなかったことを正直に申し上げておきたいと思います。このような誤用例を中心とした授業は、外国人(中国人)の先生にお任せすることの難しい分野ですから、後任の先生に引き続いていただくのが一番いいわけです。しかしながら、各学期の先生のお考えに任されている現状では、科目として正式に残しておく以外には、方法はないように思われます。現にこのコースの母体でもある「太平学校」では、そうした授業を設置し、そこを通じて得られた成果をまとめた、誤用分析の本を出版しているほどです。私も、「日本語センター報」の第11号で、「分析の結果については、帰国後に集計の後、改めてご披露できるかと思います」などと、筆が滑っていらぬことを言ってしまいましたが、ここで発表するのが一番いいのに、ご覧のとおり、まだ集計・分析が出来上がっておりません。将来、「講座日本語教育」に結果を掲載させていただくつもりですので、本日のところは、どうぞご容赦をいただきたいと思います。今、お話しするのは、その時使ったプリントです。私が使わせていただいたこの本は、森田・松木両先生が折角、体系的に分析を加えていらっしゃるご本ですから、これを全部仕上げることであれば、必ずや相当の成果があげられるものと思っています。学生にとっては、日本語の細かいニュアンスを学ぶことができますし、教師の側は、誤用例を系統的に集めることができるのではないかと

考えます。先程も大学院コースの授業のところで、少し触れましたが、中国語にも「関連詞語」というものがあって、その形態的・機能的な類似から見て、中級以上の学生に対する教育に、かなり生かせるのではないかと思います。中国人だけのクラスが編成できるとかのうまいチャンスがあったら、早稲田の授業でも活用したいものと、私自身はてぐすねを引いているところです。

この他にも、北京外国語大学での、日本語の初級の授業を参観させていただいたことや、北京大学の日本語科との交流についてもお話しすればいいのですが、またのチャンスを待つということにさせていただきます。また、常春の街昆明・シーサンパンナー・大理への旅、極寒のハルビンへの旅、武漢・洞庭湖・長沙への旅、済南・曲阜・青島への旅、南京・上海・海寧への旅と、かなりの所を回りました。ハルビンには黒竜江大学があり、武漢には武漢大学があり、済南には山東大学があり、南京には南京大学があり、上海には上海外国語大学、復旦大学、華東師範大学等がありというぐあいに、中国から日本に留学する学生のかかなりの部分が関係する大学があったわけです。しかし、今回は日本語教育事情について知る旅というよりは、任期を終えた私の単なる趣味として、1920年代に活躍した詩人の足跡を辿る旅でしたので、本日の演題とは、少々ズレてしまいます。それはまたの機会ということにして、割愛させていただきます。

ご静聴ありがとうございました。これで私の話を終わらせていただきます。
(完)

(本稿は1994年6月30日、4時から行れた日本語教授法研究会主催の例会において口頭発表した草稿に基づき、文章に起こしたものです。)